

# 言葉の喪失からの快復

—カトリン・シュミット『きみは死なない』を読んで—

寄川 真弓

はじめに

東ドイツ出身の作家カトリン・シュミット (Kathrin Schmidt, 1958-) は、小説『きみは死なない』(Du stirbst nicht)<sup>1</sup> で 2009 年のドイツ文芸賞 (Deutscher Buchpreis)<sup>2</sup> を受賞した。テューリンゲン州ゴータに生まれたシュミットは、イエーナ大学で心理学を学びながら、21 歳で雑誌『新ドイツ文学』(Neue Deutsche Literatur)<sup>3</sup> に最初の詩を発表し、卒業後は、大学の助手、臨床児童心理士、編集者などの仕事を転々としながら、執筆活動を続けた<sup>4</sup>。1994 年からは作家業に専念して、詩のみならず、小説、散文、物語など多岐にわたる文学作品を出版し、彼女はこれらの業績で、数多くの文学賞に輝いている。

順調な経歴に見えるが、シュミットは、2002 年に脳卒中で倒れている。一命は取りとめるものの、右半身の麻痺と言語障害が残ってしまう。それから 5 年後の 2007 年になって、彼女はそのときの体験をもとに、小説『きみは死なない』を起稿する。

小説は 6 章に分かれ、第 1 章は単文が多いのだが、章を追うごとに文は長く、複雑になっていく。第 4 章はもっとも分量があり、つづく第 5 章と第 6 章は、ページ数が減るものの、慣用句の多い凝った文章が目を引き、とくに最終章では、改行も少なくなり、句点のない文が続いていく。文体のこのような変化は、主人公のヘレーネ・ヴェーゼンダールが言葉を取り戻していく過程を、読者が追体験していけるように、作者が意識的に組み立てたものである<sup>5</sup>。

主人公は、プロフィールを見てみると、作者と重なる部分が多い。脳卒中で倒れたのは、シュミットと同じ 44 歳、職業もまた作家である。さらに、離婚経験があること、5 人の子どもを産んでいるところも同じである。そのため、自伝的小説とみ

なされることもあり<sup>6</sup>、体験にもとづく病院内での描写には現実味がある。とくに脳卒中で倒れた主人公の心の動きは、ときにユーモアを交えて描かれているのも、作者自身の体験に基づいているからだろう。そこで本稿では、病院の場面を中心に、主人公の心の動きを追いながら、笑いを誘うシュミットの表現に注目したい。そして、いわゆる失語症状態であった主人公が、言葉を取り戻し、変化していく過程を明らかにしていく。

## 1. 昏睡からの目覚め

第 1 章はもっとも短く、主人公が集中治療室にいた 3 週間の出来事がつづられる。作品は 3 人称で書かれているが、シュミットは客観的に描写せずに、眠っているかのように見えるヘレーネの、実は目覚めている意識を内面に深く入り込んで描いていく。

小説は、カチャカチャと金属が触れる音から始まる。医療器具の音なのだろうが、ヘレーネは、妹が結婚するときに、銀のカラトリーを塩水できれいにしたことを思い出す。自分が台所にいるのではないかと、そして誰かが結婚するのではないかと、想像を膨らませていく。別の場面では、二人の娘が車イスを持ってやってきた、とヘレーネは思い込む。しかし、娘たちは「目を閉じたときにだけ見える」(21)という。つまり現実には二人の娘の姿はないのだが、彼女には自分の頭のなかに写る像と現実に見える像との区別がつかない。ヘレーネの意識に浮かび上がるのは、意識がもうろうとした患者が見る幻と捕らえることができるだろう。だが患者の見る幻影が描かれていることにとどまらず、現実と空想が重なる独特な空間が生じ、読者を惑わすことになる。

さらに、見舞いにきた夫が泣いているのがわかると、ヘレーネは突然、出産したときのことを思

い出す。というのも、彼女が夫の涙を最後に見たのは、5年前に末娘が生まれたときだったからだ。だが、彼女の記憶は過去のものではなく、現在とすり替わってしまう。「念のため、自分の胸に赤子がいるのかどうかを確かめてみる」(19)。「いない。／ほらね、まあ念のためってことだったわけよ」(20)と、ヘレーネの独白は茶目つ気たっぶりである。一方には、家族の悲痛な思いがありながら、でも他方では、病気の深刻さに気づかず、空想を楽しんでいるヘレーネの意識が、ここでは対比されて描き出されている。このようにユーモアを含んだ表現は多くあり、作者は、重苦しい闘病小説にはしたくなかったことがわかる。彼女はインタビューで、「つまらない分厚い闘病記を書くつもりなど、まったくありませんでした。闘病中には深刻なときもありましたが、本当は楽しんでましたのす<sup>7</sup>」と述べているように、随所に読者の笑いを誘うような場面がちりばめられている。

## 2. 言葉と記憶を取り戻す

次に、ヘレーネが言葉を取り戻す過程を見てみよう。ヘレーネが発した言葉で、はじめて誰かに通じたのは、「マッズ」Mads(23)という夫の「マティス」Mattesを指す単語であった。これは、ヘレーネが言葉を取り戻していく最初の一步となる。さらに相部屋に移ってからは、ヘレーネの言葉は少しずつ増えていく。しかし、発せられる単語はしばしば、彼女が思っていることと異なり、言うべきはずの単語は、いつのまにか別の単語へとすり替わってしまう。とはいえ、正しい単語を教えてもらえれば、彼女は自分の間違いに気づき、言い直すことができる。ヘレーネが話せるようになるのは、身体機能とともに、言語機能も回復しているためでもあろうが、他者のとのかかわりによるところが大きい、ともいえる。

言葉を思い出すのと同時に、ヘレーネは忘れていた記憶を思い出そうとする。だが、脳卒中以前の記憶はなかなか戻らない。ひとりで考えても何も浮かばないので、マティスに子どもたちのようすを教えてもらおうと、忘れていた記憶がヘレーネ

に少しずつよみがえってくる。自分たち家族の家、それぞれの部屋などが、次から次へと頭のなかに浮かんできて、そうしているうちに、ついには自分が作家であることも、予期せず思い出す。このようにして彼女は、マティスの話から、欠けていた記憶をふたたび取り戻す。言葉を思い出していく過程と同様に、記憶のよみがえりにも、他者とのかかわりが大きな役割を果たしているのがわかる。

ところで、取り戻した記憶のなかでヘレーネ自身をもっとも驚かせたのは、「マティスと別れ」(46)ようとしていたことだ。2, 3か月くらいの別居を考えていたことを思い出し、彼女は不安に陥る。マティスはすべてを知っているはずなのだが、ヘレーネに対して何も語ることはない。ただ別居を考えていたのを思い出しても、今のヘレーネに別れようという気持ちがよみがえったわけではない。彼女は夫に聞くこともできず、つとめて過去の出来事を思い出そうとする。まだ東ドイツがあった1980年代、ベルリンの壁崩壊とその後の1990年代、そして2000年代というように、記憶はさまざまな時代へと飛んでいく。記憶を手練り寄せることで、やがて夫と冷めた関係であったことをヘレーネは知るようになる。

さらに、入院してから6週間たって、ひとりの重要な人物を思い出す。それは、ヴィオラという、性同一性障害をもつ人物である。興味深いのは、ヴィオラがまるでその場にいるかのように描写されている点だ。ヘレーネがヴィオラを思い出す最初の場面では、「誰かが彼女の背中に寄りかかっている気がする」(125)と書かれている。その誰かが「彼女の額に手を置き」と続き、実際に現れているかのように記述されている。ただし、その手が触れるのを「手術で感覚がなくなった骨の部分に感じる」と添えられてもいる。現実と空想が交錯した場面をすでに指摘したが、ヴィオラの登場は、現実と空想の境目がさらにわかりづらくなり、幻想的な雰囲気醸し出している。ヴィオラについては、ヘレーネの記憶が戻るにつれて、徐々に明らかになっていくが、入院中のヘレーネと直接かかわる場面はない。ヴィオラが亡くなったこと

をマティスから知らされ、これによってヴィオラはヘレーネの記憶のなかにとどまりつづけることになる。

### 3. ヘレーネの変化

言葉を取り戻す過程に戻ってみよう。思うように話せず、泣きわめき、暴れていたヘレーネだが、しだいに自分の感情を言い表すようになっていく。倒れるまえは、感情をコントロールしていたヘレーネが、自分の気持ちを言うようになったので、その変化に身近な人たちは驚くことになる。たとえば友人や息子は、ヘレーネが率直で親しみやすくなったと言い、彼女の変化を肯定的に受け取っている。

それとは反対に、ヘレーネの変化は気づかれぬ場合もある。一時帰宅をしたヘレーネが、ふたたび病院に戻る場面がある。そのとき、久しぶりに再会した知人の女性が、車でヘレーネを送ってくれることになった。車中で二人になったとき、その女性は自分の家族について話しはじめるが、ヘレーネは、途中から話についていけなくなってしまふ。それでも、興味深そうな顔で、話を聞いているふりをしていた。病院に着くと、その女性はまじめな顔をして、「あなたは相変わらず聞き上手ね、昔からそうだったもの」(278)と言う。話がわからなくなって絶望しているヘレーネのようすと、それとは対照的な知人の楽観的なコメントはコントラストをなして、いささか滑稽な響きがある。

退院の日が近づくと、ヘレーネは多くの時間を自由に過ごせるようになる。右半身は麻痺しているため、左手で書き、読書には「途方もなく多くの時間」(342)がかかる。倒れる以前と同じように仕事はできないのだが、それでも暇な時間があれば、昼でも夜でもヘレーネは書きつづける。彼女の集中力に、介護士も「彼女は非凡なひとだ」sie ist ein Phänomen(343)と驚いている。作家としての再起に賭けている姿が目には浮かぶようだ。単語を発するだけで、簡単な文章を考えることもできなかった状態から、半年も経たずに、創作を試

みるまでに快復するのは、たしかに驚くべき現象ではある。

### おわりに

主人公は、言葉を自由に操ることができず、できないことを自覚してもいるのだが、それでもなお、みずからは作家であろうとした。これはまた、作者カトリン・シュミット自身の問題でもあろう。シュミットもまた、言語障害を残しながらも、作家として書きつづけているからである<sup>8</sup>。そうだとすれば、倒れるまえとそのあとでは、その作風に変化は見られるのであろうか。

シュミットは、倒れるまえに執筆した作品を「本当に訓練された読者向きのものだったのかもしれませんが<sup>9</sup>」と振り返っている。それでは、『きみは死なない』は、これまでのシュミットの小説のように、難しく凝った文章で書かれていないのだろうか。文芸評論家のマイケ・フェスマンは、この小説は「着想の豊かさや絢爛たる文体<sup>10</sup>」という点で、それまでの作品に引けをとらないと評しているが、シュミットの他の作品と比較し、作風の違いを検証するのは次回の課題としたい。

### 【注】

- 1 Kathrin Schmidt: *Du stirbst nicht*. München 2011. 同書からの引用は本文中にページ数のみを示す。
- 2 2009年のドイツ文芸賞には、ノーベル文学賞が決定したヘルタ・ミュラーも候補に挙がっていた。シュミットの受賞は予想外だったので、受賞を批判する辛辣な記事もあった。Vgl. Felicitas von Lovenberg: *Buchpreis-Entscheidung. Ein Betriebspreis*. In: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*. Feuilleton. 13.10.2009
- 3 東ドイツの文学雑誌で、1952年から2004年まで発行された。
- 4 シュミットの履歴については次のウェブサイト参照した。  
Vgl. <http://www.literaturport.de/Kathrin.Schmidt/>
- 5 *Berliner Ärzte* 3/2010, S. 33.
- 6 シュミット自身は、この作品は架空の物語であり、主人公と作者は同一視できないと語っている。Vgl. *Montagsinterview Kathrin Schmidt*. „Ich wusste schnell wieder, wer ich bin“. In: *TAZ Berlin*.

- 04.01.2010. <http://www.taz.de/!5150084/>
- 7 Berliner Ärzte 3/2010, S. 33.
- 8 『きみは死なない』は、脳卒中で倒れたのち、最初に執筆した作品ではない。すでに 2005 年にシュミットは小説 „Seebachs schwarze Katzen“ を出版している。そののち 2009 年に『きみは死なな

- い』を上梓し、最新刊は 2016 年に刊行された小説 „Kapoks Schwestern“ である。
- 9 Berliner Ärzte 3/2010, S. 33.
- 10 Meike Feßmann: Im Reich der Apparaturen. In: Süddeutsche Zeitung. 25.09.2009.

### 論文・研究ノート原稿募集

論文編集委員会

フラッシュェンポスト誌では、会員各位の研究成果を公にする場を設けています。奮ってご投稿下さい。執筆要領は次の通りです。

- |        |   |
|--------|---|
| テーマ    | 今回は特別設けません。文学、語学、文化など、ゲルマニスティクに関わるもの。ただし、未発表のものに限ります。   |
| 原稿枚数   | 論文：400 字詰め原稿用紙で 20 枚（8000 字）程度<br>研究ノート：400 字詰め原稿用紙で 10 枚（4000 字）程度   |
| 原稿執筆形式 | 原稿は横書き、パソコン、ワープロを使用して作成し、送付は Eメールで添付書類にするか、またはフロッピーや CD をお使い下さい。どちらの場合も、プリントアウトした原稿をあわせてお送り下さい。図版を使用する場合は、前もってご相談下さい。     |
| 応募要領   | まず、論文、研究ノートのどちらかを選び、題目と主旨を 200 字程度にまとめて編集担当宛にお送り下さい。（執筆申し込みはメールのみで可）<br>期限：2017 年 9 月 20 日<br>10 月初旬に原稿執筆についての詳細をお知らせします。 |
| 原稿締切   | 2018 年 1 月 31 日<br>投稿原稿の採否は、編集委員会の審査にもとづいて決定します。  |
| 送付先    | 題目・主旨、原稿は、下記にお送り下さい。<br>松下たゑ子 〒193-0835 八王子市千人町 3-14-19-502<br>cym06106@nifty.com   |